

テーマ：茶の心でつなぐ  
—東アジア文化交流への試み—

銭正枝（セン マサエ）

京都大学環境学研究科 人間・環境学研究科共生文明学（中国）

## 1 はじめに

2015年に京都市で開催された第10回東アジア茶文化シンポジウムにおいて、日本茶道裏千家第15代家元千玄室大宗匠は茶人としての自分の役割についてこう語った。

「私は、いつの時代もどこの国でも、人は損得ではなく情により繋がるものがあるとの信念から、「一盃からピースフルネスを」の理念のもと世界中を行脚して参りました。」<sup>1</sup>

千玄室大宗匠によると、お茶の緑色は自然の表れであり、平和の象徴でもある。お茶の精神は国境を越えて、調和と友好を求める力を持っている。

中国・日本・朝鮮半島を中心とする東アジア文化圏において、茶文化は大きな影響を与えてきた。茶文化はもともと中国で発祥し、朝鮮半島を経て日本に伝わり、現地の伝統文化と融合しながら発展してきた。中国では茶芸、日本では茶道、韓国では茶礼という異なる表現がそれぞれ使われているが、礼儀と精神性を重視する茶文化は東アジア文化の基盤の一部として、地域文化の構築に重要な役割を果たしてきた。

中日韓は一衣帯水の隣国であり、文化上の共通点がたくさんある。しかしながら、現代社会において、各国は歴史問題、領土問題、経済貿易問題などの挑戦に直面しなければならない。第二次世界大戦後の東アジアの歴史を振り返ってみれば、国際関係はいつも友好と摩擦の繰り返しであった。時には、国民の間にお互いに対する嫌悪感と不信感が広がり、その結果、誤解と偏見により相互関係の悪化が生じた時期もあった。

---

<sup>1</sup> 2015年10月30日 第10回東アジア茶文化シンポジウムでのご挨拶

以上の課題に対して、東アジア共通の茶文化を絆とすることは、心と心の距離を縮める方法の一つではないかと思った。したがって、本稿では東アジアにおける茶文化の歴史と現状を踏まえた上で、一盃のお茶によって東アジア各国が文化交流と相互理解を深める可能性を探る。

## 2 茶文化による交流の可能性

### 2. 1 お茶と東アジア文化交流史

お茶は初めは薬だった、後に飲み物になったのである。中国では、8世紀に茶飲みは趣味の良いたしなみの一つとして、詩を作ったり詠んだりする教養の一つに加えられた。<sup>2</sup>平安時代にお茶が朝鮮半島を経由して、中国から日本に入ってきた。日本では、お茶は最初精神性を重視しなかったが、茶文化の受容と変容とともに、哲学的な思考性と美を見極める審美性が加えられた。そして、16世紀に集大成者の千利休により、日本茶道が大きな発展を遂げた。

中国で生まれた茶文化は朝鮮文化、日本文化とそれぞれ融合した上で、特色のあるものになり、また東アジア各国の茶文化はお互いに影響しながら、発展してきた。20世紀に入り、岡倉天心の英語著書『茶の本』<sup>3</sup>がアメリカで出版され、東アジアの茶文化は西洋及び世界が東アジア文化、東洋美学を理解する窓口にもなった。

このように、東アジアにおける茶文化の交流は千年以上の長い歴史を持っている。その歴史は東アジア各国にとってかけがえのない貴重なものであり、一体感の源でもある。

### 2. 2 お茶と東アジア伝統思想

東アジア文化圏において、道教、儒教、仏教は地域共通の思想である。それらの東アジアの代表的な伝統思想は茶文化と深く関わっている。国によって内容と形式は多少異なるが、伝統思想が各国の茶文化に溶け込んでいることは間違いない。例えば、茶文化が発端した初期、道教の「養生」

---

<sup>2</sup> 岡倉天心著 木下長宏訳 『新訳 茶の本』 明石書店 2013年 p.13

<sup>3</sup> 英文初版は1906年にニューヨークで出版された

の影響により、茶飲みが中国で普及した。また、儒家の礼の原則「敬静淨雅」は東アジア茶文化の礼儀と共通する部分がある。さらに、東アジア茶文化と禅の関係でいえば、昔から「茶禅一味」を唱える茶人がいて、茶文化と宗教を融合しながら自然と調和を求めている。

すなわち、茶文化は東アジア伝統思想（哲学）の精神性、芸術の審美性と日常生活を統一させたと言ってよい。現代社会で生きる人々にとって、伝統思想の内容は馴染みにくいが、お茶という具体的な形式によって、奥深い思想と生活が繋がれ、人々に大きな影響を与えることが可能になった。そして、伝統思想が浸透していくうちに、東アジアの人々が共有する強い精神的な土台が築かれた。それは国家間の差を越えて友好交流する基盤になる。

### 2. 3 お茶の精神

お茶の精神とえば、中国では「茶を以て友と交わり、茶を以て道を論じる」という伝統的な言い方がある。つまり、お茶は一種の飲み物だけではなく、第一に調和する雰囲気を作る、第二に親しい人間関係を維持する、そして第三に深い交流を促進する媒介の一つであると言える。日本茶道の基本精神——「和敬清寂」は相手を理解し、尊敬することを求めている。その精神に従って、亭主はおもてなしの心で来客を招き、客との間に生まれた人間的なぬくもりを大切にする。茶室の中で、人々はお互いに敬意と真摯の態度をもって交流するために、平等精神が生まれた。また、韓国茶礼では、心遣いと譲歩の美德が強調され、相手に対する思いやりが重視されている

各国の茶文化はそれぞれ異なるが、心の姿勢に共通する点が多くある。国レベルの交流において、以上で述べたお茶の精神を用いることができれば、平等の立場で、相手国を理解し、尊敬することが可能となる。それによって、より真摯な国際関係が構築できると考える。

### 3、茶文化による民間交流の現状

お茶にめぐる悠久の交流史、共通の思想背景、平和と友好を求めのお茶の精神などの要素を考えた上で、茶文化による東アジア文化交流を促進することは非常に意義深い。以下では茶文化による民間交流の現状を分析し、今後の対策を検討したい。

お茶は民間の交流、特に若者同士の交流を促進している。若者たちの深い交流と理解は非常に重要である。なぜならば、若者同士の友好は国際関係を明るい未来へと導く可能性を秘めているからである。

日本側の茶文化海外宣伝を見てみると、日本茶道裏千家は長い間国際文化交流に力を尽くしていることがわかった。例えば、中国には4箇所に出張所と6箇所（北京、天津、大連、上海、広州、香港）に同好会が設置されている。また、日本茶道を正規授業として取り入れている大学が8箇所（北京外国語大学、中国佛学院、天津南開大学、天津外国語大学など）ある<sup>4</sup>。中国の大学では、日本茶道の授業は学生の間で非常に高い人気を誇っている。

筆者の母校北京外国語大学では、「静友庵」という裏千家の茶室があり、裏千家北京出張所の先生の指導のもとで月に2回稽古する茶道クラブも活動している。そして年に1回か2回の茶会が開かれる。茶会を体験した中日大学生たちの感想を聞いてみると、以下のような意見が述べられている。

中国の大学生	日本の大学生
日本伝統文化の魅力を感じた	自分の国の伝統文化を再認識できた
引き続き茶道の稽古を体験してみたい	中国の茶文化についても知りたい
和菓子、生花など茶道と関連性のある文化にも興味を持つようになった	中国人の大学生が日本文化に興味を示してくれて嬉しい
お茶室の雰囲気が好きで、気分転換できる	
中日の茶文化を比較したらおもしろい	

<sup>4</sup> 「裏千家・中国での発展」 <http://www.urasenke.cn/jp/index.aspx?lanmuid=78&sublanmuid=681>

その中で、中国に留学している日本人の大学生は、北京で初めてお茶会に参加する人も少なくない。海外で母国の文化を体験できたのは不思議だが、同じ茶室の中で、国籍問わずお互いに距離が近いと感じたという。伝統文化の魅力は国境を越えて、人々の心を近づけた。

しかし、日本茶道の海外活動に比べてみると、中国と韓国の茶文化はまだ海外で十分に紹介されていない。東アジア地域の交流と相互理解に寄与してきた日本茶道のように、海外での出張所の設立や教育への取り入れ（例えば、外国語大学の文化体験型授業）などは欠かせない。今後は各国茶文化団体を中心に、様々な形式により活発的な民間交流が期待されている。

#### 4 おわりに

以上分析したように、筆者は東アジアが抱えている課題の解決策に向けて、共通の茶文化で交流を深めるという答えにたどり着いた。大陸、半島、列島という異なる環境で生きている国民には相違点がたくさんある。また、文化の力で複雑な歴史問題、領土問題などを乗り越えることも簡単ではない。けれどもお茶をテーマとして、一つの交流の場があれば、同じ文化を共有する東アジアの多くの人々にメッセージを伝えることができるかもしれない。また、多方面の相互理解と交流を深めるきっかけにもなれる。

心を込めて相手国のことを理解しようとすることは友好関係のはじまりである。例えば、日本茶道において「一期一会」という言葉がよく使われている。国と国、国民と国民の付き合いも同じである。東アジア各国が同じ茶室にいるように、お互いに誠意を尽くしたら、隣国同士の深い絆を大切に守っていけると思う。

#### 参考文献

岡倉天心著 木下長宏訳 『新訳 茶の本』 明石書店 2013年

神津朝夫著 『茶の湯の歴史』 角川学芸 2009年

熊倉功夫・程啓坤著 『陸羽「茶経」の研究』 宮帯出版社 2012年

田中秀隆著 『近代茶道の歴史社会学』 思文閣出版 2007年

参考サイト

日本茶道裏千家・中国 <http://www.urasenke.cn/jp/index.aspx> (2016/10/12 アクセス)